

理学療法士が、個々の装具名称・特徴と適応・構造などの装具一般について学ぶのは、装具学である。装具を用いる個々の疾患の病態や治療は、別の臨床医学科目で学ぶ。しかし理学療法の臨床では別々の知識としてではなく、患者さんの病態と数ある装具をマッチさせ治療戦略にどう生かすかが求められる。在宅・地域では、装具は患者さんの生活の道具であり環境やライフスタイルとも関連が深い。本特集では、病院から生活領域まで、理学療法士が装具をどう捉えどようにかかわるのか、現状と可能性・課題を考える。

■エディトリアル 鼎談：装具の臨床を多面的に考える(内山 靖, 吉尾雅春, 永富史子)

病院から生活期に至る装具の臨床において、理学療法士が具備すべき専門性とは何か。また多職種チームの一員としてどのような役割を果たせるのだろうか。そして卒前・卒後の教育の在り方とは。企画会議における意見交換をもとに、編集委員による鼎談の形式で現状と展望を整理した。

■装具選択や治療計画に影響する理学療法士の視点(島本祐輔論文)

装具の選択は、装具の機能だけでなく病態や脳機能の回復理論の理解が必須項目である。また従来の装具療法だけでなく、ボツリヌス治療、Gait judge system[®]、MRI 拡散テンソルトラクトグラフィなどを組み合わせることで、装具療法のさらなる相乗効果が期待できる。本稿では、治療用装具として積極的に活用するために、理学療法士として知っておくべき脳機能回復の理論的背景や、装具を活用した自験例などを中心に概説する。

■理学療法における装具療法の両立—その工夫と臨床判断(横田元実論文)

脳卒中の理学療法において装具療法が必要となる症例は多い。脳卒中の障害は多様で、使用される下肢装具の種類も多く、その選択や調整に難渋することは少なくない。装具を選択する際には多面的な理学療法評価に基づいて判断しなければならない。本稿では自由度制約に基づく装具の効用を確認し、短下肢装具に求められる4つの底背屈機能について調整の要点を含めて整理する。

■日常生活活動で装具を利用するための多職種連携と理学療法士の役割(平野恵健, 他論文)

日常生活場面で装具が必要な患者には、病棟での移動動作を安全に実施することが重要である。また、速やかなADL能力の改善を促すためには、理学療法士だけでなく、他職種と連携して装具の着脱方法や移乗・移動動作の介助方法を統一し活動量を増加させることが必要である。さらに、退院後も継続して装具が必要と予測される者に対し、入院中から装具に対する正しい知識を患者、家族と退院後にかかわるスタッフに指導することが重要である。

■地域における装具への理学療法士のかかわりの重要性(細矢貴宏, 他論文)

近年、生活期の下肢装具使用者をフォローアップしていく動きが各地でみられている。袖ヶ浦さつき台病院で取り組んでいる君津圏域包括的装具プロジェクトの紹介と、下肢装具に関する地域からのニーズと実際の理学療法士全体の下肢装具に関する知識のギャップについて述べる。装具に関する知識と制度に関する理解が深まるような卒前・卒後教育や研修の充実と、理学療法士の主体的な学習姿勢、地域に向けた発信が求められている。